

受 賞 者 紹 介

<担い手育成部門>

鈴木正親

<技術改善部門>

加藤芳郎

<農業・農村振興部門>

大石志奈子

岡本勝

担い手育成部門



額田郡幸田町

すず き まさ ちか
鈴 木 正 親

鈴木氏は、昭和47年愛知県立稻沢高等学校をスタートに、教諭、教育委員会指導主事、教頭、校長として35年間の長きに亘って農業教育に情熱を注いでこられた。

教諭時代は作物を専門に教育現場で、生徒にプロジェクト学習による実学の重要性を教え、生徒の自学心の向上と農業への夢と期待感を醸成してこられた。稻沢高校、西尾実業高校時代に氏の教えを受けた生徒は農業クラブの発表で県大会最優秀を獲得した。このことは先輩から後輩に、また県内広くその手法が伝達され、愛知県が東海地区代表として全国大会に出場する常連校としての礎を築かれた。

こうした指導教育の傍ら、昭和57年から発足した愛知県高等学校職業教育技術認定制度の農業技術検定試験の礎となる「ミニマムエッセンシャルズ」の編集委員として活躍された。

教育委員会指導主事では、農業の担い手として活躍できる人材の育成指導がきちっとできる教職員の資質向上対策や県内農業関係高校の連携や調整ができる体制の構築と産業教育施設の整備と近代化に尽力された。

さらに校長時代は、農業教育に携わる農業高校のあり方や教職員の育成、地域との連携強化に功績を残された。将来の農業の担い手の姿として、より高度な技術の駆使、優れた経営者感覚の修練が必要と説かれ、県立半田農業高校、安城農林高校在職中に100名近い生徒を県立農業大学校に進学させられた。また、農業の国際化推進として、安城農林高等学校長時代、中国江蘇省淮陰農業学校と友好校提携をされ、21世紀を担う農業者の国際感覚の醸成に力を注がれた。

そして、産業教育・農業教育の推進者として愛知県農林水産部の県行政や愛知県農業団体との連携を強化し、担い手育成の先導者としの役割を果たされた。

その結果、多くの教え子が本県農業の担い手となり、県下各地で活躍し、愛知県農業の一翼を担っている。

氏は、常に農業教育の中で学問としての農学教授に偏らず、農業の担い手として必要な教育に心掛け、真摯な取り組みと情熱をもって現在も活躍されている。

技 術 改 善 部 門



愛西市

か とう よし ろう
加 藤 芳 郎

加藤氏は、愛西市稻葉町でトマト専業農家として活躍されている。

昭和43年に15aのトマト栽培を開始された。昭和51年に增收を図るため水耕栽培を導入されたが、当時の水耕栽培は水耕プラントメーカーからの情報が主で、栽培技術が確立されていなかったため試行錯誤を繰り返しながら技術に目途がたち、氏が所属する「丸佐トマト組合」が水耕栽培に取り組む足がかりとされた。海部地域では現在、44戸、13haに普及し全国屈指のトマト水耕栽培産地となっている。

水耕栽培は、土耕栽培に比べて収量面では遙かに上回るが味の点でやや劣ると言う欠点があり、氏は水耕栽培で糖度の高いトマト生産に挑戦された。

土耕栽培で、土壤の塩類濃度が上がると糖度が増すということを経験から学び、高糖度トマト栽培技術のヒントは養液の塩類濃度を上げるというものであった。時を同じくして、プラントメーカーから食塩を養液に混入すると糖度が高くなると言う情報を紹介され、高糖度化栽培技術の開発方向を確信された。

平成12年に糖度10を目指して研究を開始された。その結果、品種を「ルネッサンス」とし、生育ステージ別に養液の塩類濃度（EC）を調整することによって、樹勢を落とさず糖度を上げることに成功された。

また、高糖度のトマトは消費者ニーズに合致し、販売にも自信を持たれた。

平成14年に、神奈川県三浦半島から海洋深層水を取り寄せ食塩に替えて使用した結果、食塩と同等の成果を認められた。当時は海洋深層水を農業生産に取り入れたのは氏が日本で2人目であった。

こうして出来上がった高糖度のトマトをプライベートブランドとして販売された。ブランド名は「海洋深層水トマト誉」とし、実需者や消費者から高い評価を受けている。

海洋深層水トマトは、収量面では通常の水耕栽培と比べ収量が2分の1弱となるが、販売単価は3倍強となり、経営全体から見れば所得額が31%強の伸びを示し、大きな成果を認められた。

さらに、氏は、開発した高糖度化トマト栽培技術を誰もが活用できるようにマニュアル化しその普及に努められている。

農業・農村振興部門



豊田市

おお いし しなこ
大 石 志奈子

大石氏は豊田市大野瀬町で、農産加工所を経営し加工品を通して地域の活性化や食農教育にと活躍中である。

大野瀬町は長野県との県境にあり、林業を主体とした中山間地域である。昭和40年代に入ると木材価格は急落し、生活の糧を求めて現金収入を得るため故郷を離れる人達が年々増加した。氏はこうした現象を目の当たりに見て、「このままでは私たちのムラが駄目になる。」と危機感を抱き、残された女性達で何とかしなくてはと「自分たちにできること探し」が始まった。

生活改善実行グループを結成し、地域に密着した生活の見直しや新たな産業興しが活動の中心となった。

昭和61年、女性4人で大野瀬生活改善グループ農産物加工組合を立ち上げ、翌62年に55m²の農産物加工所を建設した。これは、農村女性起業活動のスタートとなった。

氏は農産物加工所は地域の活性化に繋がらなければと、こだわりを持った運営を展開された。材料は全て地元産、加工品は地元行事・伝統食に関わるもの、手間のかかる手作り、販売は各種イベントの他は、地元の旅館、地元のお店に卸し地域の特産物として位置づけるよう努力された。

「道の駅」建設にも尽力され、農産物直売所どんぐり横丁設置には自ら率先して出資するなど実現に貢献された。

加工所と地元との連携を図り、加工原料は地元農家30戸から購入し、そのことが、女性や高齢者の農業への励みや元気の素となり、荒廃農地の解消に繋がっている。開発した13品目の加工品は多くの消費者から人気を博し、年商2,500万円余までになった。このことは、多くの農村女性に起業への道を拓く勇気を与えることとなった。

また、氏は都市住民との交流を積極的に展開された。昨年は都市住民800人と農産物加工を通して、田舎のよさ、農業への理解、食文化と食の重要性など相互理解を深め、引き続き交流を実施することが確認された。

さらに、都市の小学生のホームスティ、地元小学生に加工所を開放しての食と農の教育支援実践や出前講師など寸暇を惜しんで多くの人達に食と農の大切さを伝道され、その功績は大きなものがある。

農業・農村振興部門



田原市

おか もと
岡 本

まさる
勝

岡本氏は、田原市野田町の在住で昭和54年4月農事組合法人「野田花き園芸組合」を発足させ、13戸の農家と共に2団地26,000m²の温室・施設をもって、カーネーションを導入された。これは渥美半島でカーネーションが栽培される第一歩となった。

隔壁ベッド、蒸気ボイラー、ミスト繁殖による共同育苗など最新の技術と設備をもって短期間に内に頭角を現す大産地となった。産地形成のため7年間組合長としてリーダーシップを発揮された。

氏は、農業者として、農協理事として一貫して渥美の農業（田原市の農業）の振興に尽力され、取り分け花き園芸振興の功績は大なるものがある。

昭和62年に野田花き園芸組合の進展を見届け、旧田原町農協の理事、組合長を歴任された。カーネーションの産地づくりの経験から、園芸振興を更に進めるため、既存組織の再編に着手された。

当時の園芸組織は野菜と花きの混成による温室部会が生産組織で、不具合が多かったことから、組織運営の効率化、生産及び販売の強化を図るために温室花き部会と温室野菜部会に再編され、それぞれの組織活動を促し産地強化を進められた。

平成4年に温室花き部会は、バラ生産農家を組み入れ、徹底した高品質生産により、カーネーション、キク、バラを田原ブランドとして押し上げるまでに至った。

また、旧渥美郡3農協の合併を積極的に進められ、平成13年度に愛知みなみ農協が誕生した。これを機に岡本氏は田原市の農業振興にリーダーシップをいかんなく発揮された。

主要品目であった輪ギクの7組織を「JA愛知みなみ輪ギク部会」に統合し、その下に目的に合わせて4グループを設置し、組織機能強化と需要にみあった生産供給体制を推進された。

また、野菜組織も「JA愛知みなみ常春部会」に統一し、その下に特栽研究会、太陽キャベツ研究会を設置し、多様なニーズに対応できる産地体制を築かれた。

さらに、氏は、愛知県花き温室園芸組合連合会会長、東海地域花き普及・振興協議会会長、日本花き生産者協会副会長として、職責を果たされ、本県の花き振興のみならず我が国の花き振興に多大なる貢献を果たされた。

審　　査　　講　　評

あいちアグリアワード審査委員会

委員長　杉浦正行

第2回目の本年度は、6名の方が推薦を受けられ、去る9月28日に愛知県農林会館において審査をいたしました。その結果と内容をご報告して審査講評にかえさせていただきます。

推薦応募の内訳は、担い手育成部門2名、技術改善部門2名、農業・農村振興部門2名で、それぞれの方が本県の農業及び農村振興に多大な努力を積まれ、審査は大変苦労をいたしました。

審査要領に従って、慎重かつ公平に審議し、審査委員全員の合議をもって、担い手育成部門に鈴木正親さん、技術改善部門に加藤芳郎さん、農業・農村振興部門に大石志奈子さんと岡本勝さんを選びました。

各部門ごとに若干の感想を述べさせていただきます。

担い手育成部門では、2名の方が推薦を受けられました。おひとり方は、研修生の受け入れと伝統技術の伝授によって担い手育成に貢献された方であり、もうおひとり方は長年に亘って、農業教育に携わり、職責を超えて担い手育成に貢献された方であり取り組まれた内容も異なり審査に苦労をいたしました。

受賞されます鈴木正親さんは、昭和47年から35年間に亘って農業教育に携わってこられました。

農業関係高等学校の教諭時代は、プロジェクト実践学習を通して農業の魅力や面白さを生徒に説き、生徒の自学心の向上と農業への夢と期待感を醸成されました。

また、教育委員会、校長時代は、農業の担い手として指導教育できる教職員の資質向上対策や農業関係高校の連携と調整による担い手確保の環境づくり、県立農業大学校と緊密な連携による担い手の確保、本県農林行政及び農業団体との連携による担い手育成の先導者としての活躍など終始一貫して農業教育に力を注がれました。

その結果、多くの教え子が本県農業の牽引力となって活躍されており、このことを審査委員全員が大きく評価いたしました。

技術改善部門は、トマトの高糖度化栽培技術を確立された方と鶏の雛の雌雄鑑別技術を確立された方と技術内容、開発・改善手法もそれぞれ異なり、審査に大変苦慮いたしました。

受賞されます加藤芳郎さんは、昭和51年にトマトの水耕栽培を導入され、海部地域を日本有数のトマト水耕栽培の産地（栽培農家44戸13戸）になる原動力として活躍された功労者のおひ

とりであります。

そうした中、消費者に喜ばれる高糖度のトマト生産技術の確立に挑戦されてこられました。この技術は、養液の中に海洋深層水を混入し、生育ステージに合わせて養液の塩類濃度（EC）を調節することによって、トマトの糖度を大幅に高めるというものです。塩類濃度を高めれば糖度は高くなるが、トマトの樹勢は弱まり、大幅な収量低下をきたしたり、時期による品質のバラつきなど問題解決に試行錯誤の繰り返しとたゆまぬ研究によって、高糖度化栽培技術を確立されました。

そして、出来上がった高糖度のトマトをブランド名「海洋深層水トマト群」として消費者に好評を博しておられ、現在は日玉商品として出荷されています。

また、この技術改善は所得が30%アップするなど経営面でも大きな成果を認められました。そして、産地の誰もが利用できる技術としてマニュアル化され、その普及に努力されています。

審査委員一同は、この改善技術が本県のトマト産地のさらなる発展に寄与できるものとして高く評価をいたしました。

次に、農業・農村振興部門でございますが、おひとつ方は中山間地域で、農産物加工所を拠点に地域の農業振興、活性化に大きく貢献された方と、もうおひとつ方は本県を代表する農業地帯で、花きを主軸に農業振興に多大なる功績を残された方とそれぞれ活躍されている地域は異なりますが、共に本県の農業・農村の振興に大きく貢献され、審査におきましては甲乙付け難く審査委員全員がおふた方を選ぶことといたしました。

大石志奈子さんは、長野との県境の地（旧稻武町）で農産物加工所を経営され、農村女性起業の草分け的存在として活躍されています。

林業中心であった当地域は、昭和40年代に木材価格が急落し、生活の糧を求めて都市へ流出する人達が年々増加しました。こうした様子を目の当たりにして、この状況が続ければ地域社会の崩壊が訪れると危機感を抱かれました。

そこで、この地に止まって生活できる基盤づくりを目指して昭和61年に女性4人で農産物加工組合を設立されました。

地域の産物として売り出せる加工品づくりに研究と努力を重ね、材料は地元調達、自然を活かした手作り、地元行事食に関わる加工品にとこだわり、現在までに13品目を特産化されました。販売についても地元旅館や地元のお店という基本スタンスが地域の農業振興、観光産業振興となり活性化に繋がりました。こうした活動が周辺地域に影響を与え、農村女性起業への取り組に拍車をかけました。

また、大石さんは、農産加工品を通して都市住民との交流活動を積極的に実施され、農村のよさ、農業への理解、食や食文化の大切さを訴え消費者に理解と共感を与えその結果、稻武の里に訪れる人達が増加しました。

さらに、都会の小学生のホームステイや地元小学生に対しての食と農の教育など農産物加工所を拠点とした幅広い活動が、地域の活性を促し中山間地域に一筋の光りを注いだところに審査員全員が評価をいたしました。

岡本勝さんは、田原市という本県を代表する農業地帯で花きの振興を皮切りに農業全般の構造改革に尽力されました。

昭和54年に「野田花き園芸組合」を立ち上げ、渥美半島に始めてのカーネーションを導入されました。

13戸の農家と共に2箇所の圃地（26,000m²）を造り、最新の設備と技術をもって短期間にカーネーションの産地を形成され新しい風を吹き込まれました。

当時、旧田原町農協の温室部会は花きと野菜の混成した生産組織でしたが、これを機に花きと野菜の専門組織に再編されました。花き組織は、バラ生産者も組み入れて、カーネーション、キク、バラを田原ブランドまでに引き上げられました。

また、農協合併後、愛知みなみ農協組合長として田原市農業の発展に寄与されましたが岡本さんは、農業者である誇りと信念のもと、そして野田花き園芸組合長として培ったノウハウをもって特産である輪ギクの既存組織を一元化し、消費者や実需者のニーズが反映できる生産販売組織に再編されました。このことが日本一の産地として不動のものとなりました。

さらに、県花き連会長、東海地域花き普及振興協議会長、日本花き生産者協会役員として花生産や消費拡大に向けて多大な努力を積まれました。この功績を含めて審査委員全員が大きく評価をいたしました。

いずれにいたしましても、6名の方の全員があいちアグリアウードに相応しい内容でございました。これから多くの方々の推薦を期待いたしますので審査講評といたします。